



TITLE:

日本の[海]岸に於ける貝[類]

AUTHOR(S):

黒田, 徳米

CITATION:

黒田, 徳米. 日本の[海]岸に於ける貝[類]. 地球 1925, 3(1): 219-225

ISSUE DATE:

1925-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182796>

RIGHT:

岩より成れる丘陵の海に臨む處は多少凸出し、全體の海岸線は緩徐に屈曲せる波狀を畫て居る。

沿岸の海深は半島の基部は一般に非常な遠淺で中央部以西に漸次深く西端立馬崎附近では、十二尋の深溝が海岸に接近して横りて居る。(完)

日本の海岸に於ける貝類

黒田 徳米

日本の貝類——我帝國領土の位置が南は亞熱帶から北は亞寒帶に互つて居る關係上、地域が廣くない割に各帶の生物が種類多く産する譯で、

對しても同様に看過することの出来ない地位を保つて居ることを信ずるものである。

特に無數の島嶼から成つて居るため海岸線が比類稀に長く、ひいては海棲生物の生育區域が廣げられると云ふことになるが、常に海棲生物のみならず陸棲の諸生物に於ても、海によつて其交通を遮られるため特異の發達を遂げしめたと云ふ事實からは亦特殊な種類が多く存すると云ふ原因にもなつて居るやうである。

抑貝類の化石が層序學上に或る重要な役割を有つ如く現世貝類は亦海岸と其生物界の研究に

動物界で種類の數と個體の數に於て最も勝つて居るものは昆蟲類であつて、其次に來るものは取りも直さず貝類である、地球上現に知られて居る貝類は約六萬種だと云ふ事であるが、我日本の版圖内だけでも近來政治的に領土が非常に擴張せられた爲め現に四千種内外は報告せられて居る、尤も其内で陸上に棲むもの約九百種淡水に棲むもの百種内外あるから此等を差引いて殘る三千種内外は全然海棲種である、然し右の數字の内には最初報告せられた限り爾來後人

の手に再び採集せられたことのないもの、或は又記載などが不十分な爲め同定が出来ず更に別の新しい種類として報告せられたもの、なほ此外西人が産地を誤り傳へて然らざるものを日本産として報告せられてあるものなどが多少あるから實際日本の海に産すると確認せらるゝ數は前記のものよりは幾分減少するものと見ねばならぬ、然しながら海洋は無窮的で従つて之に抱藏せらるゝ諸生物殊に微小なるものに至つては俄かに調べ盡すことは出来ない。故に貝類とても形狀の大きなものではさまで困難はないが微細なものに至つてはなほ幾歲月を費やして後に於て比較的完全なファウナは知り得る譯で、其曉の數字は全く豫想を許されないものであるから前の三千種は殖ゆるとも減することは殆んどあるまい。

貝類の中には大洋上に浮游生活を營むもの又は千尋以上の深海底に棲むものなど頗る多様で斯の如き種類の數亦甚だ多いのであるが、然し大多數は其生活區域は海岸に近い海底であるの

みならず遠洋生活を行ふものでも暴風の後などでは海岸へ打ち寄せられて容易に吾人の手に採集せられるから實際貝類は海岸に産するものと云つても過言ではない、故に今假りに日本の近海特に海岸だけに産する貝類のことに就て最も簡單にでも一々の事を書き綴つたならば、大變な分量となつて、とても僅かの紙數では盡し得ないことと思ふ、のみならず其の様な企てが餘り面白い問題でもないから自分はこゝに日本産の貝類の一般的事に就いて只其一二の點を摘記して筆を擱くことにしやう。

日本産貝類研究の歴史——博物學の祖リンネの命名にかゝる貝類で日本に産するものもかなり多いが、此等は多くは泰西と早くから交通のあつた印度や支那の貝類によつて命名されたものが偶々日本にも産すると云ふに過ぎぬ、一七九〇年から一七九二年の間にグメリンによつて出版せられたリンネの *Systema Naturae* 第十三版中に日本の名のあるものが二つ載つてゐる、一は *Venus japonica* で他は *Ostrea japonica* である、

前者は今日スグレハマグリと呼ぶ一種によく似た貝であるが實物はよくは分らぬ、後者は我近海は勿論濠洲の邊にまでも分布する帆立貝の一種で月日貝と云つて、殻の一片は赤褐色、他の一片は黄白色の扁平な圓い貝で、貝柱は乾して食用に、其又貝殻は小皿代用として世人に重寶がられて居るものであるが、これ等は恐らくは日本産として報告せられた最初では無らうか、蓋し織田氏の頃西教の宣教師の往來が繁くなつて邦産の貝類なども此等の人々によつて彼地へ運ばれて遂に博物家の手に入つたものであらう。

十九世紀に入つてからは歐羅巴の船舶殊に東洋探檢の艦船が競争的に支那を始め我近海の探檢をやつたもので、自然貝類なども是等の探檢家によつて多く持ち歸られたことで、特に博物學の標本採集の爲めに遣はされた探檢船も若干あつた譯で多くの珍しい結果を齎して歸つた、め日本の貝類が頗に此の頃に於て世に知らるゝに至つた、探檢船の著しいものに次の如きがあ

る。

一八四三—四六年に互つて英國軍艦「サマラング」號の探檢此の報告は一八四八年出版されたもので八十七頁と二十四枚の美しい圖版を以て貝類が記載せられてある。

一八五二—五四年の米提督ペルリの率ゆる艦隊によつて携へ歸へられたものは琉球、下田、東京灣の貝で、セイの記載報告せられたものが十數種ある。

米國リンゴールド及ロージャ―兩氏に依つて指揮せられた北太平洋探檢船に便乗したステインブソンの採集にかゝる我國の貝類は頗る多量で之は一八五九—六一年に互つてグールド氏に依つて記載せられた。

此の間に英人アーサー・アダムスは英艦に便乗して是亦本邦近海を大々的に採集を試みて莫大な結果を齎して歸國し、之を「アンナルス・エンド・マガジン」誌上に數年間に互つて報告せられたものが實に大變な數であつた、其他、ドゥンケル及びリシケ等は我國産貝類を研究して

美事な圖説を出版して居るが、なほリーヴ、ソ
フリービー、フワイフェル、キユステル、ワイン
カウフ等は各自の著書中に多數の本邦産貝類を
圖説して居る、たゞグールド氏及アダムス氏の
報告は非常に多くの内容を有するに係はらず、
何れも記載簡單に過ぎ、或は大切なべき大さ
の記載を缺き、加之殆んど全部が圖畫を發表し
て居ないため、同定上に一方ならぬ困難を來し
て居る譯で、斯の如きものは今日寧ろ省みるの
要なく全然放棄するに如かずと提言する學者さ
へあるやうになつたは遺憾である。

十九世紀の末葉に於ては米人ステアンズ氏は
二回我國に來遊し、邦人漁夫を伴つて北海道よ
り琉球に亙る各地を漁り廻つて多くの採集物を
携へて歸國し、其結果はビルスブリー氏に依つ
て「日本産海棲貝類目錄」てふ一書を一八九五年
に世に公にせしめた、其後米國政府水産局の探
檢船「アルバトロス」號は屢々我國近海にも來つ
て諸動物を採集し携へ歸つては北米國立博物館
に納められ、其結果は同館報告書中に逐次發表

せられて居るが貝類に於ても尠からざる新種類
を發見した譯である。

此の間臺灣方面に關してはヘンリ・アダムス
フアイフェル、スミス諸氏に依つて、又北海道
樺太方面のものに就てはシュレンク氏の西比利
亞、黑龍沿海州等の貝類に關する報告中に載せ
られてゐる。

邦人にあつて貝類蒐集につき特に著しいもの
は武藏石壽、兼葭堂、畔田伴存、其他無名の熱
心家が徳川末期から續々輩出して盛に採集を行
ふと共に、名稱を考究して多く寫本ではあるが
立派な圖畫を描いて説明を試みた著書が數々あ
る、其最も大部なもの、一二を擧げて見れば即
ち、丹敷の裏裳、群分品彙、五百介品、六百介
圖、目八譜 介志などであつて、此外大小幾種
もの貝譜が残されて居ることを見れば、過古百
年間に於ける貝類研究の有様は必ずしも西人に
遜色を見ないのである、只恐らくは其以前のこ
とに至つては吾人寡聞餘り多くを知らない。

明治大正に入りては東京帝室博物館の岩川氏

及び東京帝國大學動物學教室の故内山柳太郎氏を始めとして、地質學者横山教授、徳永教授及故山川戈登氏等は現世種並に之に近い化石貝類に就いて、目錄なり圖譜なり種々有益な著書を出版せられた、最後に特筆すべきは平瀬翁の事業である、これは寧ろ世間周知の事であるが翁は明治二十八年頃から此の事業と思ひ立たれて孜々として日夜を分たず、努力奮闘、私財を投せしこと算なく、實に三十年間の長星霜を費やして日本産の貝類の新種約一千種を發見せられ且つ様々の出版物を刊行して貝類蒐集の趣味を鼓吹せられたもので、折角の平瀬貝類博物館は閉鎖せられたとは云へ、翁の功績は永く記念せらるべきであらう。平瀬翁の感化によつて其郷土の貝類を熱心に採集して其結果を目錄に或は又外の出版物に公表し或は之を行はんとして居らるゝ士に兵庫縣の舞子介類館主矢倉氏、長崎の金子氏、三重縣の金丸氏、並に臺灣の松田氏等があるが、この外出版物は著はさないが熱心に郷土の貝類フォーナを調べた人々がこの二

十年餘りの間に澤山輩出したことである。

日本産貝類の分布に關する二三の點——日本は貝類分布上から云へば、印度—太平洋區中の一亞區として半ば獨立的である。日本亞區の範圍は本州、四國、九州、朝鮮、並に支那海の北部を含むものである。元來熱帶的な印度—太平洋區の中心はフイリツピン群島であつて種類に於て、又個體の數に於て、將又美麗な色彩に富んだ點に於て、殆んど世界的に第一位と稱せられてゐるもので、今日までフイリツピンだけで約六千種の多數が報告せられてゐる、而して該區は其縁邊を黒潮に従つて我國にも展ばして、琉球はもとより奄美大島を経て九州、四國、紀州等の南岸から房州の邊にまで達して居る、西の方では九州西岸を北へ朝鮮海峽の近くまで及んでゐる、此系統に屬する貝類は大抵殻質重厚堅固で色彩は美しいが、然らざるものでも概して濃色である、此の區は、芋貝、寶貝、筆貝、袖貝、枕貝、眞珠貝、車磔貝、荔枝類の或る者、珊瑚宿貝、蜘蛛貝、布目貝等の諸屬によつて代

表せられるものであつて邦産貝類の過半數を占めてゐる。

更に一方北米區の北極的なアリユシアン亞區の尖端が西南に延びて越中蛸、蝦夷法螺、縮法螺、美之主貝、蝦夷白尾貝、繩法螺、大野貝、紫貽貝、白貝の諸屬及び大石鼈（現生八枚貝類中の最大なるもので長さ二十センチメートルに達す）などで代表せられる寒帶系の貝群は、樺太北海道を通過して南し、本州の東北岸を常陸のあたりまで達してをる、尤も或る種類（一例綾法螺及越中蛸の或るものゝ如き）は西は紀州にまで達して居る。又日本海に入つては稍や深所を朝鮮海峡の近くにまで及んでゐる、此の系統の貝類は多くは白堊質の厚層を被つてゐて多くは美彩に乏しい、脆い殻を有つてをる。

そこで日本亞區と云ふのは其の兩亞區の端と互に交はり合つて前に述べた區域に分布して居る、此の區の代表的な類は長辛螺、三稜貝、糸車、天狗辛螺、赤螺、久保貝、鮑等である。

小笠原島は全然熱帶的であるが臺灣に至つて

は支那大陸に甚だ接近して居る關係上、熱帶系の間に、琉球、大島などには産せない全然日本内地式の（日本亞區型）種類が混産するは著しいことである。

貝類の中には海山萬里を隔てた異境に、而も其の中間に何等の連絡もなく偶然的に、同一種又は甚だしい近似のものが産する例が若干ある、此等は生態と解剖上の比較が果された曉には關係が明になる譯であるが、今は産地が餘り懸け離れて居ると云ふ事のためにのみ名稱を異にして區別せられて居る場合もあり、また此區別をして居ない場合もあるが、要するに速に決定せられる日の來らんことを希望する次第である、幸ひに二三のものは既に全く別物だと認めらるゝ至つた。其の似た二三の別をかゝげ

（イ）比律賓を中心として我國では琉球に産する月貝、口紅月貝、膜貝、琉球真蘇紡貝など云ふ貝は大洋と大陸を越えた西印度諸島に普通に産する。

(ロ) 日本中部に普通に産する板浦蛸、浦島、房州法螺等は地中海に産するものと殆んど同一である。

(ハ) 南亞弗利加から報告せられて居る「ニセイボラ」「クワンスガヒ」「カニモリガヒ」等は印度洋と濠洲とを飛び越えて我國に産する。

(ニ) 日本の淺海産の磨法螺は北海道も、アリウシアン、アラスカも通らずに北米中部の西海岸に産するのは不思議である。

海岸と有孔虫

(チャップマンの「有孔虫」から)

どんなに不注意な人でも、海岸、殊に入江に沿つてなだらかに傾斜した海濱を散歩する時には、退潮のために數條の砂の筋が現れて居るのに氣がついたことがあります。此の砂は肉眼には、只の白堊質の煉けた破片の集りの様に見えますが、虫眼鏡で見れば、其白い點の一部が小さい乍ら完全な殻であることが判ります。此

斯く貝類の或る者は潮流の關係やら、環境の相似のため、或はまた習性の相通ふなどのため頗る意外な現象をあらはすことを思へば、現生種だの絶滅種だのの斷定を始め、其比例を以て種々の問題を論じる場合などには餘程慎重な態度を持たなくてはならぬことを痛感するものである、特に絶滅種の決定は現生種の採集と研究がなほ不充分的域を脱し得ぬ今日は「假定」以外は決せられない問題であらうと信ずる。

等の微細な殻は動物の最下等の部門に屬するものでありまして、内部の隔壁に孔があるので、有孔虫と言はれて居ります。

此の砂の中には、有孔虫に伴つて、他の小生物が入つて居ることがあります。例へば、二枚介の形をした甲殻類、即ち介蟲類の殻や、事によると植物の實まで入つて居ることがあります